



野作雜記譯說

四

洋学文庫
文庫 8
C 273
3





東北韃靼諸国圖誌野作雜記譯說卷之四



和蘭 譯司 長崎 馬場 貞由 奉

命

謹譯

○ 曆救一千六百八十九年日本元禄二年己巳 名譽ノ醫官一

ンテ井リキゴラバト云フ者「サンカサツキ」長寄ヨリ「エ

ド」江及野作ニ到リシ者ノ話ヲ紀開ニテ是ヲ日

本ヨリ予ニ送レル書アリコレヲ左ニ載ス

日本ノ都府^ヲエド^{ヨリ}東北又北ノ方ニ当ル^カ
一^ノシヨ^ノ奥^ノ盡^テ頭^ニ海^ニ臨^ムノ所ハ北極出地四十
度強ナリ^{コノ}對向^ニ僅^ニ海ヲ隔^テ野^ノ野^ノ作^ノ地^ニ
アリ但日本人今ニ於^テ野作ハ一^ノ島ナル^カ知
レルモノアリ^テモ又其地ノ絶界ヲ知ラズ野
作ノ土人モ亦然リ其土人長髪ヲ垂ル^ノ状
ハ顔支那人ニ似タレ^モ性質ハ野部ニ似^テ且
姿容貌穢ナリ^凡リ^凡リ日本人ハ全體清潔ヲ好^ミ

因^テ支那及和蘭人ヲモ常ニ汗穢ナリト賤^ム
ト云フ^{冊ニ}俗^ニ同^ムサ^ラレ^キコ^トウ^シン^ノ
尤野作人ノ如キハ其甚シキモノトイヘ^リ毎
歳^{コノ}土人其入朝ノ時候ヲ違^ヘズ貢^テ齋^シ
来^テ日本國王ニ拜謁ス^{按ニ}其^ノ者^ハ
ヲルヤ蝦夷土人朝貢トイヘ^ルハ^何人ヨリ^其説話ヲ^聞
松前^ノ事ヲ聞^テ誤^レルナル^{ベシ}千六百八十
四年^{日本貞享}ニ当^テ日本ノ一僧野作地ヲ訪
知^ヒン^トシ^テ其地ニ至^ル自註ニ曰^クコノ以前
モ亦屢ノ開啓ノ夕

ノトシテ到 或人嘗テ汝僧ニ遇テ其始末ヲ尋問
リシ者アリ 久而ルニ其僧コレヲ蕃ニ谷フルヲナク唯其
行浴九三箇月ヲ経ルノ地マテイタリシニ其
辺ノ風俗初ノ見タル所ノ者ト異ナルヲナク
人別ニ奇異トスルモノナシ但其途中ニ於テ
一絹布ヲ見タリコレ其土ノ製ニアラスレテ
正シク支那製ノ物ナリトイヘリトナリ汝説
ヲ聞テ日本人等曰野作ノ西北ノ処ハ韃靼ニ

接壤スルカ 假令タトイ僅ニ相隔ツルトイフモ其間
甚相近カルベク夫ノ僧ノ見タル所ノ絹布ハ
必ス韃靼地ヨリ来ルモノニナハス 松前ノ方
ヨリ得タルモノニハアラシト又曰ソノコト當時國王
ノ命ニ因テ一ノ海船日本ノ東方ノ地ヨリ發
シ其近海如何ナル國アリテ如何ナル土人ヲ
ルニヤ之レヲ覗ミメントス 自註ニ曰日本ハ
テ外國ニ出ルヲハ嚴禁 然ルニ西南ノ風強ク
ナリトコレ其所以ナリ

メトシテ到 或人嘗テ坊僧ニ遇テ其始末ヲ尋問
リシ者アリ 久而ルニ其僧コレヲ蕃ニ谷フルヲナリ唯其
行浴丸三箇月ヲ経ルノ地マテイタリシニ其
辺ノ風俗初メ見タル所ノ者ト異ナルトナリ
人別ニ奇異トスルモノナシ但其途中ニ於テ
一絹布ヲ見タリコレ其土ノ製ニアラステ
正シク支那製ノ物ナリトイヘリトナリ坊説
ヲ聞テ日本人等曰野作ノ西北ノ処ハ韃韃ニ

西北ノ地

接壤スルカ 假令僅ニ相隔ツルトイフモ其間
甚相近カルベク夫ノ僧ノ見タル所ノ絹布ハ
必ス韃韃地ヨリ来ルモノニナレバ必ス松前ノ方
ヨリ得タルモノニハアラシト又曰當時國王
ノ命ニ因テ一ノ海船日本ノ東方ノ地ヨリ来
レ其近海如何ナル國アリテ如何ナル土人ヲ
ルニマ之レヲ覗ミメントス 自註ニ曰日本ハ
テ外國ニ出ルヲハ嚴禁 然ルニ西南ノ風強ク
ナリトコレ其所以ナリ

奔涛烈シクテ救日大洋ニ漂ヒ更ニ地ニ見
カ乃舟子等皆訪知ノ志ヲ失ヒ唯命ヲ全フ
シテ再ニ帰国センコトヲ祈ルノミナリシニ漸
ク東方ニ漂ヒ流サレテ終ニ一大国ノ近海ニ
到リ幸ニ一要港ニ着ス此処ニ碇泊シテ終ニ
其歳ヲ卒リ明年北風ノ来ル幸ヲ得テ其港ヲ
開帆シ恙ナリ再ニ日本ニ着帆スルコトヲ得タ
リト云云
按ニ「ハールン」テイインレット云人ノ撰書
ニ曰日本国王ノ命令シテ近海所在

ノ諸国ヲ検査セシメシハ我一千六百八十六
年日本元禄アリトアリ而シハ即
廟ノ角ナリマ未眞ニ此船師ハ少シク大洋ヲ
然ル「」アリマ未眞ニ此船師ハ少シク大洋ヲ
渡ルノ術ヲ知レリ自註ニ曰此者ハ已而ルニ
此者偶ニ「ナンカサツチ」長ニ来ルコトアリシ故寧
ニ予カ一友人按ニ「ハールン」テイインレットノ書中
以テ其者ニ尋問セシムルニ先ツ吾三国ヲ傳
ヘシメ添ヘ遣ス所ノ與地圖ヲ出シ示テ其奈
帆漂流ノ方向ヲ示スニ其回ヲ見テ大島ニ

ノ辺彼レノ部ヲ航海シテコノ処トモイフベ
キ所ニ着セリト指示セリトイフ余其指シク
ル所ヲ閱スレハ北極出地四十度ノ処ニシテ
亜墨利加洲西北ノ海岸ニ当レリ自註ニ曰其既ニ到ルニ
云トコロハ即北亜墨利加而後彼レ亦予ニ其
ノ中ニイウ、ヨルカレナリ
地ノ人物ヲ問フ故ニ亦友人拵ニ前ノヲシテ
其既ニ余ガ知ル所ヲ以テ答へレタルニ彼領ウツキ
テ果ノ其言ノ如シトイヘリ其者人曰其吾標

着レシ地ハ其処ヨリ尚遠ク北方ニ凌出スル
様ニ見ヘタリト撰者自註シテ曰コノ説恒ナ
ラントトノ亜墨利加ノ地ヨリ凌出シタルヲ見
テイフモノナルベシ其コトハクニースラン
トハ即野作ニ近カシトコレニ因テモ尚考へ意フニ野作
ハ東北ニ鋭出シテ若シクハ亜墨利加ト相接
スルナラン或ハ又相離ルトイヘ凡是遠カラ
カルベシ状説最モ信用スベシトイフベシ且
野作ノ西隅モ亦韃靼ニ接スルナラン撰者注
ノ曰状

而説予カ意ト合セリ既ニ「フリイス」ナル者訪
知スルノ記ニ野作ト西墨利カトハ相難レテ
唯對処ス且野作ノ西モ亦韃韃ト接
セス唯海水ヲ以テ隔ツルトナリ 既ニコノ
船師死シタルノ後ハ國王命ヲ下シテ再
大洋航海術ヲ學ブコトヲ禁シ固ヨリ海外ニ
通航スルヲ停止セリ 按ニ右説信用シカタ
ノ業ヲ奇シム 予爰ニ日本ハ海國ナルマ各々
ノ論ヲ弁スベシ益シ日本人モ亦未タ尙其的
矣ヲ知ラス茲ニ「ワラロソイス・カロン」トイフ

者 按ニ此者寛永十六年己卯日本平戸ニ波未
シタル甲必丹ナリ詳ニ第一ノ卷ニ註ス
曾テ日本人ヨリ開タルト云ノ説アリ 按ニコ
第一ノ卷中第二十四 曰日本ハ野作ト相接ス
條ニ載クルモノナリ 即「キエンカル」津ヨリ野作ニ渡海スルヲ海峡ト
イフモノハ横十一里縦ハ海水西ヨリ起リ東
ハ「キエンカル」津ノ奥地 按ニ東方津輕ト云モノ
ナル 彼野作ト相接シ凡四十餘里ノ一大湾ト
ナリ大海ニハ通セス常ニ日本ヨリ渡海シテ

野作ニ到ルヲ順路トスルモノハ右相連レル
ノ地ヨリ陸行スルトハ通路難行キ易カラ
サルニ因テナリト云云此説今諸家ニ於テ確
説トシテ信用スルトコロナレ氏必ス虚妄ト
謂^クマキナリ何トナレバ其頃己ニ日本人曰
我國ハ海國ニハアラカルヘシ然レ氏未タ其
確證ヲナス^トヲ知ラス但野作ト日本トノ間
ノ海湾南北十一里東西四十里アリトイヘリ

コレ亦彼レ其古製ノ地圖ヲ見テ云フモノナ
リ蓋シ其國有ルトコロノ地圖種々紛々トシ
テ一ナラス或ハ右ニ云如ク野作ト日本ト一
海灣ヲ隔テタルノ國アリ或又其海東西ニ通
流シテ野作ト日本ト海峡ヲナシ自カラ相隔
タルノ國アリ各其間クニ任セ意ニ隨テ製シ
タルモノナルカ各紛々トシテ皆相違アリ予
今他ノ諸雜記ニ據ラス其兩地ノ間ハ自ラ海

水通シテ固ヨリ連接ビサルト云ノ正證ヲ得
タリコレ予カコレヲ聞ケルヲ既ニ教度ニ及
ブニ皆同説ニノ其実ヲ得テ相違ナキモノナ
リ即左ニコレヲ載スコレヲ以テ其惑ヲ解ク
べレ

「オ、シヨ」ト「エツ」トノ間ハ海水屈曲シテ西ヨリ
東ニ通流シ遂ニ大海ニ入ル其邊ニ「エツトガム
マ」按ニ外ノ濱ト云ルアリ此海峽ノ西北ハ「ケ
マ」ヲ云フカ

ンガル津ノ方ニ起ル東北ハ「タマサツキ」按ニ「タ
マ」ノ方ニ通流スルナリコノ海ヲ渡テ「エツ」
ニ到ルニハ預メ其凡ト潮候トヲ考テ而テ後
「ケマ」ケマ津又ハ「タマサツキ」ヨリ出帆スコノ海
峽ノ東西ハ四十里餘アリ「ケマ」前ト云ハ
即野作ノ南端海岸ノ地ナリ爰ニハ日本國王
ヨリ守令ヲ置テ日本ノ境界ヲ守ラシム然レ
ニ彼又敢テ遠ク野作ノ地方ニ人民ヲ増殖ス

ルニモアヲササルナリ 按ニ是レ彼ノ国俗ノ人情ヲ以テ論スルナリ

北海峡南北ハ彼ノ里法ニテ十一里東西四丁

里ト云フ其里法十一里トイフモノハ我國ノ

六里餘ニアタリ四十里トイフモノハ我二十

二里四分里ノ三ニ当ルナリ既ニ聞ク日本ハ

三十六スタラーテン 按ニ「スタラ」ヲ以テ一里

トス其一「スタラー」テン 町ハ六十「イキキイ」

ナリ 按ニ「イキキイ」ハ我語ニ間トイフ「ラ」
彼人因覺、テ終ニ國人等ノ通語トナセ

ルナリ即羨ニ云所ハ六十間ヲ以 其彼國ノ一

テ一町トナス「イフ」ノ羨ナリ 地量地尺

里ト云モノ我國常用「イン」ラント 地量地尺

ヲ以テ等スレハ一万二千九百六十尺アリ又

コレヲ「ウ」ト 按ニ「ウ」トハ「レイン」ラント量

ナリ然レ氏日本ノ國中ニ於テモ亦長短不同

ノ里法アリ即「イスレイ」 按ニ「伊」ノ中ニテ一里

ト云モノハ一千四百四十「ル」ド 按ニ「レイ」
ラント量地

尺ノ一尺ハ我曲尺一尺零ニ分ニアタルコレ
 ラ以テ我三十六所ヲ積算スレハ一万二千九
 百六十尺トナル然ルフ一方二千九百六十尺
 ト算セルハ幾ツベシ右イフ尺量ヲ得ルハ即
 我一里ノ真救ナリコレ或ハ我四尺ノ一尺ハ
 コインランドト一尺ト同尺トナシタルト見エ
 シカレハ一尺ハ四十尺トナシタルト見エ
 テ算スレハ四十尺トナシタルト見エ
 所謂五十町一里ノコトナルベシアリ
 エユシマ馬ヲ對一名ケルバールド梅ニ是和蘭
 人誤テ對馬
 ノ西称トナルモノハ「ナンカト」門長ノ西北ニ在
 ナリ後ニ其論アリ

リコレ日本諸属島ノ一ニシテ其最モ遠ク相

離レタルモノナリ我方ノ諸圖未タ曾テコレ
 フ載スルモノナシ此島ノ君長他ノ日本諸族
 ノ如ク毎歲東都ニ参勤セリ梅ニ毎歲トイフ
 モノハ傳因ノ失
 コレアル高麗人ハ羨ニ往來シテ互市ヲナスナリ
 益シ日本諸属島ノ中ニ於テ著シキ者ハ「ヲキレ
 隠」ランド平「アマツカ」草「サ」自註ニ曰ぬ島「号
 岐」コラシムルモノナシマ「ノ」コウス「梅ニ「ハ」アレシ
 ヲ多ク金「ノ」ナシマ「ノ」コウス「梅ニ「ハ」アレシ
 ヲ出ス」著セシ書中亦日本諸属島ノ名ヲ出セリ皆
 茲ニ載ルモノト同シ但此「ヒ」ノキレ「レ」メ「コ」ワ

クノニ名ノ註ヲ異ニス 即曰「カト」ハ「エナウ」也
ノ近海ニ在リ「コノ」ハ「ミカヤ」河ノ近傍ニ
在ルモノトアリ然レハ「コノ」キレマ「ハ」コノ
マ姫ノ擄音「コ」ワスレハ「ミカ」河ノ訛音ナル
ハ「ハ」ハ「レ」シラ「イ」シ「書」中「ゴ」ワ「ト」ヲ
ハ其心実ヲ載テ誤ラス 故コノ「ハ」ハ「チ」
ト「西」ニ在リ及「ハ」チ「シ」ヨ「ハ」等ナリ益シコノ「ハ」チ
シ「ヨ」ハ「ノ」エ「ド」ノ近海ニ在テ諸侯ノ中罪アルモ
ノハ茲ニ遷レテ其主トナス 故コノ「ハ」ハ「チ」君長
ハ總テ日本諸侯中ノ下ニ位スルモノナリ 按
コノニ遷レテ其主トナス以下傳聞ノ誤リナ
リ恐クハ慶長初年淳田中納言秀家父子放流

尔後唯彼少将宗勝等ノ諸人漸ニ妖鳴ニ謫流
ノ「多」シ「コ」レ等ノ事ヲ聞失ヒテ「コ」ノ事強ノ
説ヲナシタ
ル「ル」ベシ

撰者曰對馬ノ一名ヲ「ケルバールド」トシ即
日本ノ属島ノ一ト云ノ説疑フべレ近歲「コ
レ」ア「舞」朝 捕ワレテ彼国ニ留リ竟ニ免サレ
帰国シテ今ニ存命セル「マ」ツテウス「エイ」ホツケ
シ「ナル」者「アリ」ニ「ア」リ 予就テ對馬ノ「コ」ヲ問
ヒシニ彼「答」テ曰余等駕シタル海船洋中

ニ於テ破損シテ漂ヒ為シ方ナク捕ワレト
ナリタル処ハ「ケルバールト」トイフ「鳶」ナリ
其「鳶」ハ「コレア」朝鮮ノ「セシユレ」一名「ムーセ」按ニ
朝鮮南海岸ノ地名ナルベシト云処ヲ隔ツ
然レ氏諸国ニ地名見ヘス
ル「凡ソ十四里」詩按ニ我ニニシテ北極出
地三十三度三十分ノ処ニ在リトナリ又右
破壊セル舟中ノ夥長ヨリ関ケルニコレ亦
「シユレ」對ハ「ケルバールト」鳶ノ外ニ北極出

地三十六度ノ処ニ在リ尤其「ケルバールト」
鳶ニ於テハ日本人ヲ見スト云フ然レハ「ケ
ルバールト」鳶ハ愈々別「鳶」ニシテ「コレア」朝鮮
ニ属スルモノナルベシ「シユレ」對ノ一名ト
スルモノ必ス非ナリ
按ニ「ケルバールト」鳶
タル一「鳶」ナリ輿地同ニ見ユ但近世ニハ
鳶アルヲ知レルカ舊製ノ同ニハ見ヘス
○日本人總野作中ヲ一部ニ分ツ其一ヲ「エスロマ
ナユコイ」按ニ「エゾマ」ト名クコレ其最モ日本ニ近

クシテ即其寺令ヲ置ク処ナリ或人曰其ハ千
六百七十年日本寛文十年庚戌日本国王ヨリ兵ヲ遣ワシ
テ悉クコレヲ服属セシメリト按ニ年記ニ寛文
十年伐蝦夷平定
ト見ユコレト合ス若クハ「シヤマ」シマイン
争乱ノ「ナルカ」松前ノ「ニハ」非ルヘシ
ヲ「エスソノ」シマ按ニ「エソノ」チ
ト云フ「ナル」ヘシト名クコレ
其北部ニ在ルモノナリ其三ヲ「エスソ」ヲク按ニ
「エソ」
ノオク即ヲク「エソ」ト云フ「ト名ク韃靼ノ
ニテ唐太ヲ「イフ」ニ似タリ」ト名ク韃靼ノ
出タル一端地ヲ云ナリ即コノ「エスソ」ヲク
ト云

ハ野作奥遠ノ地ト云義ナリ

○日本人嘗テ謂ヘラクア細ア洲アトア星リ利カ洲ト
ハ野作ノ北方ニ於テ相接シタリト又曰野作周
圍日本里法ヲ以テ三百里ニ「キウレウ」ノ大
ガアリト云フ日本ノ東北ノ絶界ニ一港アリ野
作ニ渡ルモノハ皆必スコレヨリ船ヲ登スルナ
リ爰ニ一異事アリ蓋日本人等其港ニ碇泊シテ
ハ容易ニ出帆セズコレ其港極ヲ繁華ナルニ因

テ水客等耽樂シテ皆心ヲ蕩カシ不得法救ナル
カヌ時ニハ西風ヲ待テ東行シテ務テ日本ノ近
傍ナル島々ニ到ルトナレ私ニ交易シテ大利ヲ
貪ニテヲ亦メシカ為メ攷察スルニコン等ハ凡
テ野作渡海ノ舟子等私欲ヲ恣ニスルノ本志ト
スルトコロナリ

○博識ノ一学士東印度ヨリ予ニ野作ノ紀事ヲ送
ルアリ左ニ載ス

予既ニ日本地圖攷葉ヲ得テコレヲ視ルニ或
ハ野作ト韃靼トノ間甚相近ク海峡ヲ以テ隔
テタルアリ或又野作ノ北ニ向ヒ別ニ一海峡
ヲ隔テ、一島ヲ畫シテコレヲ「エリガシ」ニ按
唐太ヲト名ケ韃靼ハ其尙北ニ畫シテ復タコ
レト一海門ヲ以テ隔テタルアリ日本國語ニ
テ「テキヨ」或「ヲク」奥ト云ハ遼遠懸隔ノ地ト云
義ナリ然ルニ韃靼ノ野作ニ臨ムトコロヲ「エ

スソテキョト呼ヘリ

按ニエノ名ヲ因ニ記スルモノハ日本人ヨ
リ傳聞スル所ナルベシ唐太ク「エヅカシマレ
」[」]エリノオク「ト」[」]称スルモ未タ因サル所ナリ
曾テ西人ニ同ク受シモノ漫リニカク谷夕
ルナラシ「」オクノ解モ似テ非ナリ「」[」]韃ヨリ奥
ニ「」アラス口蝦夷ヨリノ奥ナリ

○野作ノ土人ハ總テ海濱ヨリハ内地ニ多ク居住

ス 按ニ 玆説彼ト玆 皆其性頗野鄙愚昧ナリ日本
トノ羨ハナリ

ノ北岬ヨリ東ニナリ又野作ノ西岬ヨリハ南ニ
当テ二嶋アリ其名ヲ日本ニ「」[」]キン 按ニ 及「」[」]レ

銀 梅ニ ト云フ羨ニハ金銀鑛アリト云フ即日本ニ

テ「」[」]キン「」トイヘルハ諸鑛ノ總称ニシテ本義「」[」]コウ

ト「」[」]金ノ「」トナリ又「」[」]シマ「」トイヘルハ「」[」]エイラント「」

鳴ノノ羨ナリ故ニ野作ヲ「」[」]エス「」[」]ソ「」[」]シマ「」ト云フ氏

コノ羨ナリ

按ニ是金鸛銀鸛ノ事ナルズシ明ノ時刊セル
地球図ニ日本ノ東ニ金鸛銀鸛アリコレ西洋
ノ古説ニモ亦コレアリ爰ニ拳クルモノ即コ
レナラン但其所在未タ詳ナラストイヘリ或人
曰右ノ舊説金華山ノ名ヲ因テ或ハ附會スル
モノナランカト

○日本ノ岬岬ニ向ヒ野作ヨリ遠カラステ一鸛
アリ即其名ヲ「マヨシマ」ト云

按ニ日本ノ北岬ト云ハ南部津軽ノ諸岬ヲ云
フナルズシ然レバコレニ向テ蝦夷ニ近クア
ル鸛ト云ハ所謂大鸛或小鸛ヲ云ナラン

○南部ノ西北ノ海ニ臨ミタル地ニハ大小教多ク
河水相並テ海ニ注ク処アリ其河口ノ処皆頗ル
屈曲シタリト 按ニ出羽ノ北海ニ臨ム処ヲ
唯曾テ日本ニ到リタルモノ、一説ナリ九千六
百四十三年ニ当テ 按ニ寛永二十年「カステル」
リキエムル船ノ事ナルマシ

沿海ヲ通航シタル者コレヲ説カス故ニ予敢テ
コレヲ因中ニ載スルヲモス

イスキリガナト云ハ野作ノ西北ノ隅ニ在リ而
テ「カヒトシマ」ニ對

按ニ「イスキリガナ」ハ蝦夷ノ西面「イシカリ」ガ
岬ノ擣声ナラン「カヒトシマ」ハ「カラフトシマ」
ノ擣音ナリ後ニ韃靼ノ東方ニ突出セル一隅
ヲ「カヒトシマ」ト云トアリコレ西人「カラフト

シマト云ヲ聞誤レルノ擣ナルト必セリ

○千六百九十二年日本元録難船シテ終ニ日本地

ニ漂着スル者共アリ其人物何方ノモノナルト
ヲ辨セス其容貌ハ甚勇猛ニシテ骨節太ク色黒
シ鼻高ク眼黒ク且大ナリ頭髮ハ耳ノ土ヨリ項
ノ方ニ剃リアケ耳垂ニハ枚孔ヲ穿テ黒絲ヲ貫
キタリ其言語相通セス但劬モスレハ「バクシ」ニハ
バヤン・タハツキニ「トイ」タリ其人ヲ辨スルト麻

刺^{ラハル}襪^{ハル}人ノ常礼ノ加クシテ少シモ日本及支那
 人ノ風姿ニ似タルトコロナレコレ元ト何国日
 リコノ小舟ニ駕^ノ標^ニ表^ルモノカ日本人亦コ
 レヲ知ラズト顧^フニコレ若シクハ野作ノ迹^ノ寫
 コムバクニースラント^トコト^トノ辺^{ナル}者^カ或又
 其迹傍未嘗地ノ者カ又ハ南海中ノ駕^人カ彼レ
 其指頭ヲ以テ砂上ニ畫シ日輪ヲ尊敬スルノシ
 カタヲシテ見セタリ是レヲ以テ察シハ蓋シ南

地方ノ者ナラン 彼又ヨリ暖国産ノ果实ヲ識シ

○コレヨリ既ニ三年前「ソクエス」^{按ニ琉球} 島^ヲニ^異

人皮舟ニ駕テ漂ヒ来ルアリコレヲ「サケユマ」^{按ニ薩摩}

ニ連レ渡ル然ルニ日本ハ外国ノ人ヲ固ク國中

ニ容レサレバ遂ニ我日本商館^{按ニ長崎本島}

夫人ニ傳ヘテ以テ他邦ニ送ラシム乃我船コレ

ヲ^バ太^ア亞^ア胸^ア亞^ア即^交响^トニ^伴ヒ^往キ^タリ^シニ^彼吏

ニ方言ヲ習フ志ナク唯恒ニ網ヲ曳クノシカク
ヲナシ又毎子ニ「バタン」ト云フヲ云ヘルノミ
ニレテ其言詔絶テ通ヒズコトヲ以テ何国ノ者
ナルト云ソコトヲ審ニセス終ニ皆跋バ太タ亞ア亞ア
ニ於テ死シタリコレ今ニ於テ何地ノ者ナリシ
マ詳ラカナラスト舊傳スルナリ

梅ニ前條ハ元禄六年癸酉ニシテ後條ハコレ
ヨリ既ニ三年以前琉球云々トイフハ元禄

三四年ノ間トナル共ニ其年曆ハ此説トナ餘
年ノ相違ナルニ我延宝八年巴丹人漂着ノ
アリ必コレナルベシ其證ハ巴丹人漂流記ト
イフモノヲ見ルニ延宝八年庚申五月十七日
ノ夜日向国飢肥伊東家領分ノ沖ニ異船一艘
漂着ス其乗組ノ者十八人其六月十八日長寄
奉行牛込氏ニ送ル五嶋町ニ名ノ方ニ一宿シ
翌十九日十善寺御薬園所ニ指置レ御茶種苗

手入役ノ水野小左エ門へオンアツケ漂人口^ク
供^カニ人救二十五人乗組琉球へ船ヲ寄ヒ水取
ニ揚ル所俄ニ雑瓦ニ逢ヒ破網吹切り洋中ニ
走り出テ陸ト船ヨリ互ニ手ヲ上ケ招キ涙ヲ
ナカシ夫ヨリ日向国へ漂着ス云云追ニ琉球
ヨリ異人手廻リ衣類等薩摩へ達シ七月十日
長崎へ送ル〇琉球ニテ水取りニ揚リタルト
キハ板ノ止ニ二人乗り小桶箕笠椰子殼持參

ノ由仕カタス〇其人救ノ中琉球ニテ二人日
向ニテ五人病死預人小左エ門取扱ノ中其人
救ノ中三人ノ者朝夕又ハ雨ナト降ル節打寄
リ南方へ向ヒ何事カイフテ指ヲサシ愁歎ノ
躰ナルヲ見テ不図思ヒ付盥ニ水ヲ入レ石ヲ
以テ鳶組笠ノ葉ヲ以テ船ヲ作り土ニテ異人
ノ姿ヲウツシ乗セタリシニ三人ノ者ドモ石
ヲ取り退ケ銘ニ嶋組ニ作りカへ尤東西南

北ヲ定メ日月星ヲ作り日暮ル、程行燈ニ火
ヲ點シ三ヶ月ヲ出し鳥ノ鳴声ヲイタシキカ
レ日ノ出タルヤウスヲ見セシニ三人ノ者笹
船ヲ東ヨリ西ニ遣シ西ヨリ南ニツカワシ其
者共「エナ」ト云テ落涙ス是ニヨリテ其大意
ヲ考フルニタカサゴ近鳥「ハ、マン」「カ、マン」
「タハコ」トイフ寫其餘鳥ノ名言イキカセシ
ニ甚悦ビ銘ニモ寫ノ名ヲイフテイヨク「タカ

サゴ近所「バタン」ノ由シ申出テ其所在ノ「辨
シタリ」〇其人高サ五尺八寸六分或五尺六寸
三分各大抵相同シ十八人共ニ兩耳無ニ孔ヲ
穿ツ〇文字ハ横文字〇毎朝水ヲアミ九月頃
マテ湯ヲ用ス〇衣服フロシキノ如キモノ禪
ハ水綿寄絲幅七寸程織リ面ノニ色ツカイ絲
ニテ模様アリ云云〇飯ハ土鍋ニテ焚ク〇唐
キビノ種持渡リ六月蒔キ九月食ス〇船ハ藤トウ

カラゲ鐵釘所ニニアリ〇追ニニ十二人病死
残り六人九月十九日出島へ遣サレ所蘭陀へ
相属セラル其命ヒラル、趣キハ「バタン」人共
在処「タカサゴ」近所トキコヘタリ世話イタシ
送り届リベシトナリ加比丹謹諾シ申上ルハ
タカサゴト吹咄吧トハ程隔リタリ依テ吹咄
吧一兩年サシトノオキ言辞ヲモ習セモシ
所柄^{カラ}ヨキニオイテハ船ヲ遣シ高賣ヲモ致サ

セベキ由申上テ受取り奉リ出帆ノ節六人共
ニ吹咄吧ニ伴フ何レモ同処ニテ妻ヲ有テ一
人ハ泥^{ヤクラン}鑊^シ通餘ハ銀名ノ午傳トナリ居ル由翌
年加比丹申上ル二三年ハ彼等カ^{ヨウス}勤靜言上ス
云々前後略ス詳ナル「ハ」本書ニ因説アリ者
フベシ此條言フ所必スコレナルベシ能ク其
事ノ符合スレハナリ^{長寄志卷之十二亦}
同フメ且詳説アリ
前條元禄六年癸酉ノ漂着異人モ同レク^巴且

人ナランカ但元禄元年ノ丁ナレハ丑六年ノ
相違アレ氏同書ニ曰元禄元戊辰年長崎在勤
山岡對州宮城越州ニ公月番ノ時尾列紀列長
崎志ヲ按ニ其卷十二ニ貞享四年丁卯年紀列
漂着異國人三人呂宋ノ者ナルヨレ又元禄元
年戊辰薩摩漂着異國人二人臺灣海辺淡水ト
イフ所ノ漁人云云コレヲ是トスベシ尾紀ト
スルモノハ記者ノ誤リナル
バシ呂宋淡水共ニ坂地ナリヨリ兩度ニ異國
人五人送り遣サル依舊例越加公ヨリ水野小
左エ門、取扱命セララル小左エ門バタン辞ヲ

以テ尋レ氏相辨ニス但残ラス裸ニテ禪ノミ
イタレ衣類トテハナキユ、
モノナランカト「タカサゴ」辺ノ細ナル島ノ
名申レキカレ「ハタン」島「エナ」島「キレル」島「ハ
ハマン」島「カハマン」島「タバコ」島「カ、マン」島ト
イ、ケル時異國人共悦ヒ己レカ胸ヲタ、キ
銘ニ「カ、マン」トクリカヘシ申スコレニ
因テ「カ、マン」人ニ極ム五人ノ中二人ハ惣身

ノ内ニ入星色ニノ模様カラクサナドヲ入ル
コレハ頭分ノモノト見ユ餘ノ三人ハ入ズミ
ナレ下人ナリト見ユ云々思フニ必ス此事ノ
紀図ナルベレコレ亦日向漂着ノ者ト相同レ
キナリ其[」]パタン・パツバヤンタバツキマレーイ、タ
リシトイフハ小左エ門カ示レタル[」]パタン[」]ハ
ハヤン[」]タハコシマレヲクリカヘレタルベレ我
実記トコロ遠西教十里外ニシテ傳図ノ説ヲ

録スルト全ク相符合ス但ニ餘年歴ハ大ニ差
ハ且傳録ハ混交アルモノハ又傳ハ又図ケル
ノ失誤ナルベレ
退テ按ニ[」]パタン等ハ南天竺ノ属島ナリ輿地
諸図ヲ見テコレヲ知ルベレコノ漂着人物凡
俗衣服器具南地暖国ノ人タルヲ明ケレ右本
條ト我実記トヲ係レ考ヘテ詳ナリ本編ヲ撰
者ハ坎漂客異人ノ以テ或ハ野[」]作ノ逆島[」]コム

バクニトスランド辺ノ大ナルカト思ヘシ故
ニコニ載タリト見エ大ニ誤レリトイフベ
レ彼ト坎ト南北寒熱ノ相違懸隔ノ差トイ
フベシ

テ井ルキ、レムフランワーハン、ニローツプ、トイフ者韃
韃訪知ノ為ニ航海セシ時野作地ニ到リ即其
見聞ノ紀事アリ左ニ載ス

韃韃及野作ハ絶域懸隔ノ地ニシテ我國ヲ距

ルヲ最モ相遠シ故ニ其国土ヲ熟知スルヲ能
クス今復ニ見聞ノ及フ所ヲ以テ心ヲ竭クシ
テコレヲ説クベシ抑野作人ハ嘗テ我國ノ古
人ノ云ヒタル「ヘリイセルス」按ニ和蘭国往古
ノ一種ノ人物ナリ
ニ似タリ其地ノ北極ノ高度ハ我國ト相同シ
キカ故ニ四時氣候モ亦大ニ相同シ然レモ東
西ノ経度相差フコト一百八十度ニ及ベハ我
日中ハ彼国ノ中夜彼国ノ日中ハ我中夜ニシ

テ昼夜相及スルナリ

曾テ野作^{エソ}ハ日本ノ西北ニ在リト思ヒタリモ

然ルニ今彼地ニ至テ是ヲ実檢スルニ日本ノ

北北東^{子丑}ニ在リ予コレニ由テ思フニ嘗テ

野作ノ東岸ト云レハ即靉靄ノ東岸ナルベシ

且^フフランソイス・カロン^ノ 按ニ寛永十六年己卯

前^ニ見ユ^ルナル者^ニ帝國日本記事トイフモノア

リ其中ニ 彼レ屢々日本人ニ尋問シタルノ説

ヲ出セリ 梅ニ坎人ノ紀事ノ文 曰日本ノ東北

ノ陵出シタル地ト野作トノ間ナル海灣ノ幅

ハ大約十一里アリ坎海灣ハ^ノ野作ト

相接シタル処ニ至テ東海ニ出デストイフコ

レニ由テ考フレバ未夕日本人其総国ノ幅負

ヲ究ムルニ至ラズトイヘ氏 野作^{エソ}ト日本^ハ

大地相連レル^ハ既ニ分明ナリト見ユ^ル 梅ニ

非予既ニ千六百四十三年 日本寛永ニ 十年癸未ニ 當テ

自カラ彼地ニ到リコレヲ実檢スルニ既ニ察
セシニ及ノ野作ハ日本ノ北北東ノ子丑ニ在リ
故ニ嘗テ韃靼ノ東岸及日本ノ北岬ヲ因スル
モノハ皆誤マルモノニテ信用スヘカラザル
ナリ今野作ノ北極出地四十二度ヨリ四十九
度ノ処マテハ既ニ実檢シテ分明ヲ得タルカ
如シトイヘ尺高未ク疑フベキヲアルベク其
詳ヲ究ムトイフベカラズ然レバ後未再ニ訪

知熟覽ノ実説ヲ関カズンハ其精ヲ盡セリト
ナスヲ得ス

千六百六十八年日本寛文八年戊申ニ当テ又一説ヲ得
タリコレ嘗テ千六百五十三年日本承应二年癸巳八月
梅ニ我大暑ヨリ十三日「スベルウル」トイヘル
処暑ノ間ニ当ル自註ニ曰コレ朝霧ヨリ十
者「ケルハールツ」島ニ三里南ニ当テ北極出地
三十三度三十分ノ処ニ在ル島ニ漂着ス然
ナリ其周囲九十四五里アルトニ漂着ス然
ルニ土人來テ悉ク舟子ヲ捕フ按ニ惣人数ニ
十六人アリ後

二見 其翌月二十九日其捕へタル処ヨリ北方
大丸四里許リ「レイア」按ニ和蘭国ノ産「ヤニス」
ウエルテ、フレートイヘル者ノ居宅ニ伴ワル
者モ亦既ニ千六百二十七年日本寛永ニコノ
島ニ漂着シ水ヲ求メンガ為メニ端舟ニ駕テ
三人上陸セシニコ、ニ捕ラヘラレ尙留滞ス
ルモノナリ但其餘ノ二人ハ人韃靼人ノ為メ
ニ奪ロレタリ其捕ワレテ爰ニ居ルヲ既ニニ

十六年ヲ経ル故ニ殆ント生国按ニ和蘭ノ言
語ヲ忘失シテ彼「スベルラル」ニ始メ對シタル
寸ハ言語互ニ通ビガリシトナリ

按ニ西刺諸因往ニコノ「ケルバール」ノ名
見ユ但支那東方製スル所ノ地因未ク峡谷
アル者ヲ見ス

翌千六百五十四年日本承应三年甲午コノ「ケルバール」
ノ嶋ヨリ彼等ヲ「コレア」高ニ連レ往ク「コレア」

高 兼 = 浪リテ 馱路救街ヲ 経歴シ 西北ニ 向ヒ 大
凡七十五里 詩 按ニ我百 五里 ヲ 過テ 其王 府ニ 至ル
其 穴ハ 北極 出地 三十九度ニ 在リ 即コノ 一ス
ルウル ノレアル 其 風土ヲ 記スル モノアリ 左ニ 出ス
高麗ハ 北極 出地 三十四度 三十分ヨリ 四十
四度ノ 間ニ 在リ 乃南北ノ 長サ 百四五十里
按ニ我大 凡三百里 東西ノ 幅凡七十里 餘 按ニ我大凡 百四十里
コレ 処ニ 海中ニ 陸出シタル 崎岬ヲ 省キタ

ル 算秋 十リ 坎ヨリ 東南ノ 間 辰巳ニ 在ル 日本地
ノコレニ 向テ 突出セル 一隅マテ 其相 隔タ
ル 一ハ 大約 二十五里 按ニ我 五里 あり 坎西方ニ
ハ 支那 南京ノ 海灣アリ 而メ 北ハ 支那ノ 北
部中ニ 在ル 大山ニ 接ス 又 東北ノ 一辺ハ 大
海ニ 注ク 坎海ニ 八毎 歲我方ノ 船ヲ 遣リテ
秋多 鯨 獵ヲ ナス 十リ 按ニ我事未タ 曾テ 固 然ル 所ナリ 又 朝鮮地
ニ 兩回 漂着セル モ 何レノ 若シ 坎海ニ 往テ
固ニ 往未スル 船ナリ シヤ

鯨鬚ナストナクンバ果シテ朝鮮ハ一箇島
ナリト云モノアラン 北海中亦春夏ノ間ニ
鯨魚ヲ鬚スルナリ 日本朝鮮トノ間ノ海ハ
コノシロ
ウヱイカツトレ 按ニ新增嶼ト魯西垂
ノ間ナル一條海ヲ云 ノ方ニ通
流スルトハ必然ナルベシ 何レトナレバ予
屢朝鮮ノ船師ニ北東北ニ国土アリマヤ
ヲ問フニ唯渺茫タル大海ノミニシテ更ニ
地国ナシト答ヘタレバナリ

朝鮮国ハ冬季寒強ク堅氷雨雪繁シ其時候ニ
ハ皆貂皮ヲ以テ製シタル服ヲ着ス 既ニ捕ワ
レトナリタル者モ皆コノ服ヲ以テ寒ヲ凌キ
シトナリ其囚ワレタル惣人数本ト三十六人
ナリシカ朝鮮ニ於テ病死スル者二十人ナリ
其残ル十六人ハ千六百六十六年 日本寛文
六年丙午八
月 按ニ我大暑ヨリ 四日八人ノ朝鮮人ト共ニ
処暑ノ間ニ当ル
一小舟ニ駕シ其地ヲ同航シ同月八日ニ日本

ノコランド戸平ニ渡リ同十三日逐ニ「ナシガサツ
キ長」ニ着シテ我自国ノ人ニ逢フヲ得タリ
トナリ

按ニ長崎志系九ニ曰寛文丙午年丑島ヨリ
阿蘭陀人八人送來ル但阿蘭陀船朝鮮ニテ
破船シ存命阿蘭陀人拾五人朝鮮ニテ捕ワ
レ及難儀其内八人小船ヲ盗ミ逃出テ丑島
ニ漂着セシヲ当表ニ送來ル殘七人ノ者長

崎迫送給ルヘ干旨相願フ仍テ御奉行所ヨ
リ宗對馬守ヘ仰越ル其年對馬ヨリ捕ワレ
居タル阿蘭陀人七人送來ル即甲心丹方ニ
相渡サルコレ能ク我記録ト符ス人殺八人
ヲ六人ニ作り丑島ヲ平戸ト記セルノ類ハ
傳因ノ失ニテ我記ヲ以テ実證トスヘシ但
其漂着湍在ノ由ハ百有餘年ノ後ニテ其書
ニ依テ詳ニスルヲ得タリ

「ヘンテ」ナリキ「エンテ」ナレク人ナル者ノ著述ニル
航海紀事ニ曰「スピッツベルケ」北ニ赤通北緯七
十七度ヨリ八十度ノ間ニ在ルノ北海ヨリ朝
一大海國ナリ所謂夜國ツ云々
鮮ニ到ルニ其海路七百里按ニ我大九アリ而
レテ鯨魚ハコノ「スピッツベルケ」ノ北海ヨリ朝
鮮海ニ至ルニ凡十二日ヲ経テ到ルト云
按ニスピッツベルケ捕鯨ノ盛ナルヲハ諸書
ニ見ヘタリ海路コ、ニテノ里教ノ「イカ

カアルベキヤ

既コノ説有テ後ニ東印度ヨリ本国ニ帰帆ス
ルニ朝鮮ト日本ノ間自註ニ曰其間ニ十
海ヲ通航スベキヲ察明セリ且野作ノ北界ハ
未タ嘗テコレヲ查照スルモノナキカ故ニ日
本ノ東海及「アイス」海門按ニ「エトロフ」ト
云フ通航スルヨリハ其ノ海路大ニ勝レリト
ス但此海ハ大洋ヨリハ及テ風波甚ク烈シク

若し今北海路ヲ通航スル者有テ其海路中標
的トモシモノハ即朝鮮ノ北海ニ出ルノ限ヲ
突換シ又其海路ノ安否ヲ候ヒ知リ速ニイハレム新增
ノ近海ニ到ルベキマヲ辨明スルニアリ予
按ニ必スイハレム新增ノ南岬イハレム「イルノル」ラント北
岬ウ「エイカト」註ス前ニヲ通航シ速ニ東南ニ至ルベ
シ其證拠トスルモノハ既「リンスコー」テシテ
ル者歟辺ヲ始メテ航海ヒシ紀事中ニ曰「ウエイ

カト」ヲ通航スルニ始メ海峡ニ入り而テ又大
海ニ出ツルトアレバナリ
又千五百九十五年日本文祿四年乙未「イルレム」バレン
ツナル者歟海ヲ通航シテ後ニ「イ」ハラツ岬辺
ノ南岬イハレムヲ通行シテ五日路ヲ経シハ東北
ニ大海アリコノ海ヨリ復東南ニ航ヲ進メタ
リト云フ又右ニ云「リンスコー」ラシノ説アリ
海峡ヲ通航スル「カ」日路ヲ経シバ又海門ニ

入ル 按ニ准海門トノミ云タルハ北海中ノコ
イロイ 鴨ト「サモエー」テシレノ間ナル海門
ヲ云ナコレヲ過レバ忽チ大海ニ出ツルトナ
ルズレシ 按ニ前ニ註スル フ経テ五日路ヲ
リ或人曰海門ト同テ海門ヲ云
往ケハ阿比河ノ口ナル海ニ到ル坎辺ヲ過ク
レバ又「ギリ」カ河 按ニ今時「エニセイ」ト稱ス
ルモノカ坎名諸因ニ見ヘス
ナル辺ニ到ル即坎辺ハ魯西亜ヨリ船ヲ通シ
テ交易ヲナス処ナリ坎辺ヲ過レバ「モルカン
カイ」 按ニ「レナ」河若シクハ
アナバラレ河ヲ云カ 河ナル近傍ニ到ル

此河ヲ以テ魯西亜ト韃靼トノ久界ヲ限ル即
此河ノ東岸ヨリ韃靼ノ地ニシテ其西岸ヨリ
ハ魯西亜所管ノ地ナリトイヘリ 按ニ今時ハ
一帯ニ止ル
里野ト稱シテ皆魯 又曰阿比河ヨリ起テ北ニ
西亜ヨリ沿領ス
銳出シタル地ノ北岬ヲ「ムー」トイフ坎辺總
テ魯西亜人恒ニ住居ス右ニ云「ムー」岬ヲ後
東方ニ至レバ大海奔浪アリ坎海韃靼ノ北界
ニ注キテ南ノ南海ト一躰トナルナリ

魯西亜人阿比河ノ東「ギリツサ」河前ニ註スノ近傍
ニ来テ互市ヲナスト云「ハ當ニ右ニ云ルガ
加ク然リウ」井ルレム・バレンツナル者ハ此「ギリワ
サ」河ヲユコリダト云ヒ亦其邊魯西亜人在留
スト云「ライヘリ又「リンスコーテン」曰此河
ヲ魯西亜人呼テ「ギリツサ」ト云ヒ而シテ其邊契
利斯督ノ法徒ノ鯨恰モ厄トシヤ勒シヤ有シヤ亞人ノ行ヒニ
似タリト云々即此河ヲ過レバ又一河アリ按

前ニ云フ「モルカ
ンサイ」河ナラン 此河ヲ以テ魯西亜所領地ノ
限リトス 故兩河ハ千五百九十四年日本文録
三年甲午
「リンスコーアン」ナル者創テ其邊遍歴シクル
時ニ「スロイン」及「ノルキウリス」ト呼ル者即
是レナルベシ「サモ」人モ亦云「ルカイヘリ
改羅巴」ヨリ亞細亞ノ東方ニ到ルニ其西海ヲ
廻テ到ランヨリハ東方韃靼ノ北海ヲ通スル
コリ大ニ利アリ然レ氏其妨害トスルモノハ

海上ニ氷塊流レ来テ屢船ニ中リ大ニ破損ス
ルヲアリ既ニ千六百六十八年日本寛文八年戊申ニ航
海スルモノスビツツベルゲ^レノ海辺ニ於テ大氷
塊ニ逢フツリ高務ノテ東方ニ進船セントヒ
レニ其氷塊連綿トシテ遠ク白海ニ到リ強ク
テ進ムヲ能ワスレテコレヲ止メシトナリ然
レト亦既ニ「サンスコーチン」ノ出シ如ク温暖
ノ候ヲ待テ航海ニハ必其害ハアルマジト思

ワル、ナリ

○右紀事ヲナセル^テイルキレン・ブランツ^ツナル者自
カラ野作^{エソ}地ニイタリ其北辺ニ及ブモ亦往返シ
タルナラン予^ク此地方ヲ因シタルモノハコレニ影
シク見ルヲ得ク^リ嘗テ^テ此地方探索ノコトニ
於テハ毎ニ勞劬^セシモノアリト見ユ

○其教乗ノ因中ニ於テ予カ信用スルモノハ唯左
ニ出ス三因ノミナリ是レ既和蘭人親視シタル

所ノ真景ヲ模寫シタルモノナリ

左ノ図中諸名ハ西洋人私稱スル所ナリ我
呼ノ本名ヲハ朱書シテ以テ參勘ニ便ス但次
卷第一圖ヨリ秀八圖ノ中山地ノ方位北東^{イヌイ}入
東南^{タツミ}ナト記スルモノ東方通用スル所ノ乾兌
及十二支等ノ符號字ニ換ヘテ是ヲ譯ス乾^{ヨイ}
イ^イ巽^{タツ}ノ類ナリ

○東印度ニ往來シタル和蘭ノ商客等ハ「コムパツ

ニスラント」ト北亞墨利カトノ間ノ海ヲ

其幅大凡半度按ニ我十四里餘ニアタ餘ニ因シ

「コムバグニスラント」ノ南北ノ經大約七八里

詩按ニ我大凡十五六里北極出地四十六度ト四十七度ト

ノ間ニ在ル一箇島トナシ野作ノ最南ノ地ヲ四

十二度トシス「カピトシマ」按ニ「カラフト」シマノ

見ハノ南ニ二三島岬トイハル南ニ「ロアマン」

タリハノ南ニ二三島岬トイハル南ニ「ロアマン」

イラントト名ケシ
島ノコトナルベシ
フ盡シタリ既ニイフ
ケト号スル船モコノ
ゴムハリニイスラ
コヲ巡見シタレ
得ル故ニ予カ製スル
簿サズ

フリイスナル者ノ日記ニ曰
シトハ一箇島ニシテ
其中ニハ峨ニタル高山有テ
クムバリニスラ
四辺ノ海濱皆岩石アリ又
地容易ニ上陸ス

ベカラズ然レモ唯コノ東北及西南ニ当テ大丸
三分里ノ一許リノ間ニ小湾トナル処ノニ寄ル
ベキナリトイヘリ
按ニ「フ」レ
往ニ和蘭人等ノ
到リレ時ハ其「コロイス」岬
按ニ「コロイス」ハ十字
因中彼レ所各ルニ後テ十字
岬ト誤スルモノコレナリ
ト「スタア」ニエイヤ
ント「ク」ナノ東岬ノ間其海ノ潮路東北ニ流シ且
其海水恒ニ渦旋セシトナリ又其和蘭人此島ノ
位置ヲ測量セシニ北極出地四十六度十一分針

盤ノ偏差十度三十八分ニテアリシト云リ

○日本往古ノ言語皆支那ノ言語ニ異ナラス是レ

ヲ以テ考フレハ其始祖元ト支那ヨリ来ルモノ

ナランカ

按ニ言語トイフハ漢字通用ノコトヲイフカ我

言語何ソ支那ヨリスルモノナランヤ

○日本ノ「ミヤコ」

按ニ西洋人傳聞ニ出タルト見ヘ
後来我京都ヲ「ミヤコ」ト通称シ来

ルノ南ニ当リ南海濱ヨリハ相遠カラスレテ「イ

シ又「メスレ」按ニ伊勢ヲ云ト云フ国アリ 千六百九十八

年日本元禄十一年ニ在リシ其国主ヲ「マツランテイ

口」エト子ヨウノカミ、サツシケンケ 按ニ右平越中
守定重ノ轉音

ナリ其頃桑トイフテ毎歳其自カラ收ムルトコ

口十一万「エツク」アリ 自註ニ日皆未穀ノ救ナリ即

十銭ニトナリ 按ニ此時ノ桑名城主ヲ伊勢ノ總

而テ扶国ハ日本開闢ノ後創メテ人民ノ生レタ

ル所トイフナリ

按ニ甚シキ大謬説辨スルニモ及ハスナリ
或ハ地神ヲ初祖ヲコトニ祭祀レタルトイフ
ノ因アママリナルニマ

○右ニ云フ「伊勢ト「蝦夷トハ其音声少シク差
ヘリ歟ヲ以テ考察スレハ日本人ノ太祖「イニヨ
リ出テ「ト云フ其「イニハ「イニノ訛音ナラン
カ若シコシ実ニ然ラハ韃靼人野作ニ渡リ漸ク
日本ニ到テ其元祖トナルモノナルベシ且日本

ノ古語亦皆ヨリ韃靼語ニ似タレハナリ是レヲ
以テ察レハ支那ヨリ渡リ「ト云フ説ハアレト
其支那ヨリ渡リ「ト云フハ稍歟後ノ「ト云フナラン

按ニ傳聞中ノ尤甚ト謬誤ノ臆説余スルモ亦
贅言ナリ

○日本ノ大古ノ神社ハ「イニノ「伊勢ノ国ニ在リトナリ
茲ニ参拜スル者ハ皆白衣ヲ着ス日本人曰其地
ニハ神ノ出テ開闢スル寸住居セシ彖屯尚今ニ

存在スルト梅ニ天ノ岩 其始ノ祖神ハ忽然トシ
テコノ「イシ伊勢ノ地中ヨリ突生シタリト云モ
アリ又一説ニ「イシ」ハ閑閑神ノ天ヨリ創メテ降
リシ処トモ云フトイヘリ

按ニ神代卷ノ「ヲヲ偏聴セルナリ」謬説ノ中ニ
モ斯ク閑トリレ「ノ」感心ナキトモアラヌ

○日本ニ往来スル「既七度ニ及ベル我方ノ船師
日本人ヨリノ傳因ヲ予ニ告テ曰韃韃ノ東方ニ

陵出シタル一隅ヲ「カビトシマ」ト云フ梅ニ「カラ
ト傳ヘシヲ「カビトシマ」ト閑謬マルモ「ナラシ
コレ近年ノ「ナル」ヘキカヌコレヲ傳ヘシモノ
「カラ」トシマレノ一箇ナル「ヲ」ヲ詳ニヒサ
ルト見ヘテ韃韃ノ一隅ノ地名トナセリ野作
ハ固ヨリ一箇島ニシテ其野作トコノ「カビトシ
マ」トノ間ナル海ハ甚々狭之峽非ク且其海底深カラヌ
皆泥土ナリト云フ梅ニコレ亦傳因ノ
謬説取ルベカラヌ

野作雜記譯説卷之四終



